春乃日

三

春社日

信濃何丸撰釋

端書社うち

一書に清水納言の書給へりしを見てくむらのさきもりしるくもれとあるを發端とせりと云て　愚考の所なるもいとよきまうとも社の上らに童丸の枝折れける竹籬かと通さふ白氏文集曰五架三間新草堂石階松柱竹編墻形とあるに無味堂曰重五を松井半七名古屋の郊外尾村より別莊を名づけらる

須臾まに行の惟子脫くむ
社のもりをみる留をいきく

愚考此詞を讀るに和の書紀の笛形の名留りて第二と号すとて次社伝去留の由来より弱ね入ル黄帝の時鳳凰来儀す見渡の行を伐是風壁の流るるよりて作りるひし笛形まて是必聖代の兆なりと見迄て文王を附しるり書紀の笛より文王社附へき訳なり

文王社七中ふ　角社形き等

雨の為りくの

世上の説るを文王圃方七十里芻蕘者往雉兎去往ハ美臺美沼を築くとれ所ひららしきるを大なる非るを芒まて近世の俗説社あふるきるを知るを平此附を守乳すふ文王の一名をいひて附り社伝ハ人いまを見社先注まるいふ通わ最白の後るまたよりて

まことを當分を解す一まきとこのみをうしなひ
人をえ文王の德をなげてまことに面をむすびひさ
ふるをと杜撰憶說よりして時なりてくひるのをり
詩の大雅文王之什曰周原膴々堇荼如飴爰始爰謀爰契我龜曰止曰時築室于茲搜之
陾陾度之薨薨築之登登削屢馮馮百堵皆興
鼛鼓弗勝留をいてく涙となりを引出し
て土はらと附くとしいふまを心よ拾て角の
るきこまをとりを働うるるり茶の紫先丸くして
角をて木紙きハ槌のぬく書のはとしいふせうる
ふりれるり

書紀より半を奠れ砂りて
無考遠倉八幡を居より社櫃まて十八
町すくて此急砂涼くくして三足往て二足戻る

この如半をとしい砂涼をしい他の神社よ非す
花よ長男の氏帝舞なるる
無考凡中をを事物紀原曰唐一事用韓信所
造云々名物六帖云唐書曰悅傳張丞急以
紙為風考高百丈過悅當上悅使善射者
射之下略全体を長男のなく一きるの数りう
ををきをちさくして小児児童のまてなをを決ハ
傳物志曰紙考糸を引てよるを児童のをを
ゆてのをを弄をしむ芝肉漿を洩さむるるり
ををきをを長男のなるを決と作りをるを言言の
服容をり遠倉足物よりきは時をるり

いとまこうしこきき　五位　北村　寅
松北　末よ宮司うの門のをうハよをて
ををの法をを　をえぬ志ふまを　そ

愚考五位の殿司は内侍宣司なりて對の陪ゐるを称職の宮司なりしれあるも見えたれと禁中れたるるを途なるとそもそもゐる職系日針博士七位典系既は昇殿して五位と云て

然からは豆腐を考へとられけり

愚考考を未明の考きまて人の往来まいきを見えあり豆腐貴の紀起を陪ゐる一本はとら豆ゐると書て物の名称は別ゐるもの世ゐ豆腐の族をゐるもれなるもの世ゐ豆腐の族をあるとは世近代の俗書を粗々ゐるて竜すむ所ゐるを為ゐると為ゐるを為ゐるの数もかゐる新はしき次第はあるやゐ一書にゐるといふて見えを渥しくはるゐ

一ゐ流とゐるゐるを為ゐるを見えるゐるを為ゐるを豆腐を云ゐるて渋ものゐすを為ゐるの新思書なり一しゐるそやといふ酢をねを一名ゐをさすゐるゐ別ゐるゐるを至て京くして京ゐてそやと心れのゐるてゐるゐるて百ゐ一のてゐるゐる通行の人とをしみゐるゐるといふてゐを形し解しゐるむ

糖蕎麦を住居ゐ俗称して

我名を糖の名ゐよゐふ　丹

蕎麦日中代雑波ゐ米屋太郎助といふの米穀を賣買するを家業とするその住ゐるちゃゐ横町ゐ通ゐて世渡りの通路ゐて官舗へ中をて自分れ糖をゐけゐるしの天変地妖のゐ

亡こしてらけ玉するなるまゝ
役利のるゝ方代を橋ゝ費し流ゝ家れとろ一て
小藤ひとろ賣れこゝ住吾とゝ玉ゝいくか
と形く代るゝ玉て記絶すゝとそさまそけれ人
此橋を鄙助橋と呼るゝゝゝとこや此橋
いるれ存して海紀路本ゝ所ゝこゝまろ

新無　杉ゝ　出家　かくし
かくきす西りるゝ敬よゝむ
的瓶　ひとゝ門を　二人してとけ

成美日西行家集ゝきゝ家たゝきゝ勢むか
くきす山田ゝ玉れ板のむらゝ　一書ゝ貞享
元年冊さゝ紀りゝ芋洗ゝ女西りるゝ
敬ゝゝ心此ゝを取て連ゝとゝ形ゝゝ
愚考二ゝの附玉ゝそのゝし的瓶の法ゝハ

朝ゝれ裾の西行谷の俤ゝて芋洗ゝゝれ余意
を取て附ゝるゝゝゝを祖翁のかゝを取て
附ゝゝす又附ゝを取てかゝとすゝ可ゝり
附句を附ゝゝ染真ゝ族ゝ見ゆゝ俳諧ゝゝと
き人の示るゝ一し

世ゝゝゝゝ居泪ゝ　年ゝゝて

一書に中院の居小督の居ゝの俤ゝゝと云
愚考淺瀬の附を見ゝ八芝全小督の居ゝとの
俤ゝゝゝの居櫻町中納言成範卿ゝ女
高倉帝ゝ妃ゝゝ法盛のそゝみをうけ淺瀬
世ゝこのゝゝ杉大井川ゝ入水して失ゝの墓ハ
淺瀬の天龍寺ゝゝゝ

ゝゝ玉ゝゝゝ山の八重櫻
愚考ゝゝ良の新の八重さゝらと詠して

古人意八重橘の名有来れり古人は一名
殺若返とも云へり
ふすくいき 清水 乳 の事
愚考云の藤の花を陰干にして只口をすすぎて
を除ふうれしく出て養生論曰二月行法分
飲陰地流泉令人發瘧是不可知也素
問云まとを只口すすぎ汁まて云事なるか
ら氣を知ふ物つのひしるす
笠白き大、素 祭 是ふ ちり
弁地日日本紀曰仁德天皇四十三年百濟の
王子素酒公奉れ名匠なり雄略帝の時帛
紗を献ふ也ふ大秦の姓を賜ふと云こと禹
豆麻佐祭を九月十二日を牛祭とい
ふ物語ふ ふいふ えておく

蓑 所 沙汰りて二人 裝 利む
曉 いこのふ 車 ゆくすち
一書ふ秦氏の家 設 為 ちし 於 ろ 二人の子
物ふを竹王者を弱王と云牛 飼 草 苅 の
して大秦の里ふ を 弱王 ふ ふ ひ ふ 後世ふ
樂人 ふ ふ ふ ふ 東儀氏 ふ 此 ふ ふ 宮
治 指 遣 ふ 東 洞 院 ふ 行 海 車 と い ふ 変 化 物 り
夜ふ入 ハ 門 戸 を 閉 て 往 来 ふ 此 変 化 目 一 つ
ふて是を一本ふ ふ 彼 車 を 押 物 ふ 物 ふ 人
いそふふ戸の義 定 ふ 何 ひ ふ ふ 変 化 の 云
ふ ふ 我 ふ ふ む 汲 ふ ふ ふ ふ ふ
ふ ふ ふ て ふ ふ ふ ふ ふ ふ 一 首 の
ふ を 詠 す 羅 と ふ ふ ふ ふ ふ 車 の や
ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ て 此 歌 を ふ て 感

愚忍考よめいうをど
しかりやゑ子ともの之しるり
見をてあそびにふけりて出るを渡し上人喩ハ
世を制て火宅をその遊むとなる喩いふの車
ゆくまちとて其世の喩いこの外のなる
あやのゆゑむと未来をあけの車外の法華
三車一乗の心を説に世中を牛乳車の為なり
をんじひの家をいつて出せし文字語の附にて
前を語りきて私のひの家を出しられとしの合
に喩いふに車やらる夫三車一乗といふて手
車鹿車牛車彼三車をみて法子を誘引し
而後に只大車の宝物をきて荘厳し安穏有
一乗をとあのり三車に乗はらしみるそ火
の車なるむかといふ腎なりすべてこの訳あり
てらんも平生の俗語平話を見ゆかせうにらい

とらんとま上手ときらいに断なりへし
萩にみ まよ す 万日の原
一番に万日の草みて洗濯によきもしま寺よ
まて万日の念式をすべてのあと見るべし
さらひのまる木の根にある花の飢とらむ
枚亭曰 飴の魚まで胡桃に酔ひのあまのありみ
の葉をとりみちらして水上にすそ皆浮て流ると之
湯ひ きもの 喜乱 湯の 山
愚考湯の山さて摂津の国有馬の温泉之舒明
帝三年涌出すと云へ則十月行幸なり是温泉
行幸の始なり歌にめとめでたくみゆきを三輪の
神あまたあらしあのまのいそゆかるへし 行基
僧正経文をも書写し泉底に埋むとなり諸書
あり湯の山権現と申まつり日本第一の名湯之と

云く一説に湯殿山なりそれは誤れり湯殿山を生殺なり
あるいは大山に非ずと湯殿山を生殺なり
紫色湯の峯なり必竟なるべし

のとなり　や紫紫の袂　伊勢の常

此外に種々の雑説あり一書に鹿島の
一書に東西なし　一説に東西なし
岩陰常なりと云
のよきことを常袂と廣く作りなり
なり一

内侍の衣代と眉の圖

一書に内侍は天子の御例に倣りて
袴を着し朝夕に女官なり古今礼服をえらび
和名抄に女官なり　愚考眉黛を唐土
もて素に神の明皇避安祿山難幸成都

今西工美十眉圖所謂連頭八字走山倒暈
横雲驚翠新月卦月柳絮峩眉是也卓
文君の眉を黛をやとしたるなるべし
そむかるとやとなり和漢眉の圖異なる一
説に　軍中に軍中に行きくるよ
自當の内侍と義貞の侍とをねて軍をなすよりこれを磨礪え
義貞内侍をねて軍をなすよりこれを磨礪え
年越前黒丸の城に籠りて流矢に中りて靈寺
名を　栗とも　栗とも　中あり
一書に大内小内原侍れ何相列山中に村老
搗栗を献上せし事あり
一夜に岩を馬に寺を建
愚考摂津國内中金龍寺千歳阿闍梨
寺然へのいとなみに馬を遠て法門助一出て

往来の旅客を助けける故に酒天とも或ハ寺
に居まらて一宿をゆるしなましけて粮雑なき
ものなりし元亨釈書扶桑隠逸伝等にみえたり
是其父子手歓喜といのりし故にかく所為ハ出
にて子歓と号す平生笑歓にして遺像を笑仏
と唱ふと云て所々の雅集にまつし
いかに魂まつりきさらぎの月
愚考馬のに寺といへるを込て伝ふるを必
天王寺と申すにもあらむ太子黒のかる此併にし
て二月の魂まつりなるらむ和論語に日倭国
仏法のはじめなり建天王寺推古帝三十九年
二月廿二日化四十九歳と云て魂祭れ事を往古
より六齋なり二月十五日五月十五日七月十四日八
月十五日九月十六日十二月晦日報恩経に見えたり

すゝの花まきて混すへのこれ
陽炎れもえのこれる夫数まで
春雨袖に濡歌いそく
田を拾て花見る里にせきらかり
愚考此三句を国栖の翁の伝なり源平盛衰
記日清見原天皇大伴王子にむかひたまひしのひて
吉野の奥にかくれたまひし時此ところ国栖の翁栗
の御料にうなひといふ魚など供御に備へ天皇
御製によみ給ひ其の国栖の翁の子なりしかば
かくてのれみ伝ふきそまきりたるかくむ始をも国栖
の翁交始なり後の花見る里をよし世の謡に
してのこりたるなり
かゝる節を伝へし中の
侘や三井れ未ちれ訪ふてへ

愚考浅井家の長政若狭三位安通世
しに志賀寺の慶地を再興して盛安寺と号し
て相續すをハ崇福寺の法名をとゝのへとゝ
そ分ゆゝしきのゆゑ次ぎ時を近江の山しの
雪けしきを物ゝらゝ

言ひくれみそゆきのやうし

文政三年廿九日　月　さゝき

愚考是ゝの佛尼の十六夜日記の後に安嘉門
院阿佛尼逝去ぬる氏郷と記載ぬ事とゝ
はきて遠倉豪一所記ゝ十月廿九日
の早天ゝ箱根の山ゝ出ゝ廿九日ぬ月の
出しほを見ゝて彼日記ゝくゝ去年ハ
ゆゝうして暗ゝ旅ゝ雪の山しとゝひ
ぬる月ゝむすひゝ眼力目賞すゝ絶ゝ

そゝ二花三月ゝ出ゝ法ゝそゝを
巻ぬ月四ゝ出ゝそゝ世評ゝ月ゝき浪の白八月
ゝ物ゝ人ゝ出ゝ物ゝ人ゝ物ゝ出ゝ物ゝ人ゝ
ゝの追加の表会ゝ月ゝ出ゝ月ゝ物ゝ
ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ
の的ゝ出ハ白ゝ出ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ
ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ
とゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ

君ぬ法とゝゝ　沖　ゝゝ　ゝけ

愚考大和ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ
ハ借ゝ物ゝ時平公ゝハ鈷一ゝ物ゝ人ゝ物ゝ酒
ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ
ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ
ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ

せうし大臣の供して階の下に伺候せしか
殿上のひさしにて消息とりつたへける
思答のさきのやくをつとめし此事のうへにて夜
半にかみまけ雅文をかいて世にて大臣はじき
おもむきをしくく答應しければと云て良臣也
勤功廣大なり月をへずしていくほどもなく一度
のうちに三位の意味を得てたちまち出世なり
霜をかみわけと後ろつきをおもむきの雪をも追る
事のうちにおかみわけてとるも後る事もむつむ露霜雪
雪ふりのまた皆雨も冬に氷をも水の代なる事ハなり
なのに類なし。その歌より此故事によくよく謹の
御を増て世のうらみをうらむるや

蛙のみ啼て出しき蕪見えりけり

成美曰源順和名鈔に云ゆへしきを忘ることなり
まんとりしらてよきこころの寒しるに消し用ゆ
茎山曰南史曰孔稚珪斉明帝之時為南郡太守
門庭之内草莱不剪中有蛙鳴王晏嘗鳴鼓
吹候之聞群蛙鳴曰此殊聒人耳蛙云我聴鼓
吹殆不及此晏有慙色此るは謹慕なるよくも
出て名高き蛙なるまゝ且葉をも孔稚珪にて
のる侭なるべし

額にかゝる　蓑　雨　孔ありけり

恵孝章孝標詩之一聯田家無五行水旱
卜蛙聲茎等に符合しける眼なり。この山中
無暦日の意にまた叶につき類なきめずらしき
といひより枕をかたむけて額にある事なりとう
けるなり一し次に第三のるは[illegible]なりてとハ

かなしき眼なきは一言に應て其の人を悲みて
まことめでたき又その人は心ありて何事をはかるに遠ざかる
思ひとまる告意を別にして人を一人なりと思ひ遠きを
此侍りに一時する時を附られしこひとつまにて
侍なとうしなふにありて一根に見えなる人を發す眼
内にあまた遠き第三を持の場にて此身一出し又發す
眼にあまた遠八第三八所内へ入ねはあるまじきとあるいは参
をりに旅き何の物のありこゝろて信ず人の心に霊の
日進加の六ありを皆にありて内を得るる形し老
皆にてそなとうしてしとをさる事へし只逢ふ物にまゐ
に逆附迎に上手に附のありては今の難の何とむ
岩比たより 發 見 ゆ る さ と
愚考新浮に於ける歴の此秋所のものゝしに使ひて
寺跡より雲別サキの濱を出より見て遠き両岩

さひへるなる間より離れ見えるといふ所なる施
餓鬼はの後ろに瀧ゆくの夢後に叶へれ
標山日房別に長者ヶ濱といふ所あり、いふ一その
子れ船の出るを待ちて大岩をたく切
あけさせて沖の船を見あるに様はくのしまして
岩の上に夫婦ともの形りて今その名あ存しと
いへ今猶岩上に夫婦石の形あり施餓鬼の
附なそのまうひろまむや　愚案曰おもいそ悼みに
施餓鬼れ僧といふへとしてみえまえ讃州屋度
の浦なる心よりもちて附するなるむ實を弘法大
歳の跡及ひ出家密つに入まに旧跡にして
弥谷山善通寺なり四國八十八ヶ所第一番なり
次の岩間よりと附するを海上へのりてよりて
佛ゑつるまへてつこの此跡平原よ下る一とよ門前

所ありて海上よりのぞむ時は出崎の岩小嶋
なとよそほひありてたゞ一つの紙にもありその
このいまにして陶器を製す志度焼といへるの
なかにも海上よりうちむかひなる鯨に
よりみるに附なり大いさ寄られなしきたた
りひをかへる形なり一し

解 てや松のむ枝 むすぶ 松

一書に曰霊帝に往来の人の庄のおもとりに
松の枝をむすびて旅のなり岩代のむすび
松は有間皇子故ありてむすびおかれたる
おりなるべし　愚考むすび松は岩代と原
より紀州岩代山のむすび松は有馬皇子の
むすびおかれてよめる歌日本紀に岩代の濱
松枝を引むすび身に幸あらはとのむとぞ

よそれのみ又拾遺集にも有松好忠歌あり八
えさいくろのむすび松何年を経ぬるまでの
ことつきぬ文治中八伊勢の浦の笑みにいつる所のむ
すび松なり時は紀の岩代の松の傳ある一し
ひきるすも旅のひとゞのそりみ彼の辺
に知己の後あるゆえにそれとなりしゆるの
う一首あるなりけり我おもひ入ぬるし
に此度前のむすび松を解てやむとる彼好
忠の歌をきゝを經しもありしことそ心
にふまへてかくよみけるなるべし
今よりかそふれるとてや見な

同十九日荷兮室にて

愚考傳に曰經るのて留に留まで一句韵子なきに
一首一るの法なり此巻経るの又留二ヶ所なり

ゆへに此割書をなして旦暮と共に一の室にゐて二
度の俳諧あるによりて短冊に向ふを引て定まる
ものなり初懐紙の中短冊のに留二ヶ所なりこの
百韻に五十韻ほど二度に出来て能情を達
八短冊に留二ヶ所なりしも常にせず翁の自注
とりて花は故事とりて注書さ萩五十韻にして
後五十韻の注にもしるしおくのしめりにて同宅にて
まだ宿二の二度に来りて則二度ありしかんと二つと
いふなりそれよりしてゑらるべき法と
記すへしそれまでを近代は俳諧に百韻の中短
冊にて留三ヶ所なりとを見る此多きを極しの法
やみまじくる俳諧を数多見るの後此事を始
めてその罪を糺すの外すゑて近来を規矩
準縄ともなし古めかしとて吟味ありし人のすくなく

なりけり半をも道に随ひける
秋の和名に　これら
愚老源順を浅縁天皇四世左馬助挙之男能登
守従四位下なり和歌の達人梨壺の五歌仙古今を
奴の才人永観元年卒行年七十三自然知れ人
まで和名抄を本朝の亀鑑なり
おもひの　月　よるみえし物こそはも
詠そ花　田家　よりて唐織にて
一書に山門や三井寺の男の髪を唐織にゆ
かかり田家の里の挑女をもまたをうつして又
唐織に結ひなりしは昔の詠の哉曲このよい
とりなりと　一書に堂上方の女中の旅に
出る様なり読そ花とぞ歌のさまを詠みつつ
とりなりても田家の大津なりの田家もうつして下

繋ぎ合せて巻物とし唐海に結上げるなり　愚考此解は面白くいひまはしたれども先注のまさるに如かず大体の拙女所為なれども新古共に佳句なり

女中は旅客の学問あるべし一夜書物伴なりて

旅人の学問あるべし　紫式部八町を過ぎ

故に曰哀と云ふ　成美曰野九を延喜

第四の宮なれば九の嫁九の奥概あまた八

方の関はあるべを曰哀川原といへ

紹鷗の瓢を始めて求めし

一書に武田伊豆守信玄入道して大黒庵紹鷗

と号す東山殿に仕へて茶を嗜む　或人問此

仮花生の瓢なれども次の句は附句なるべ

しと難す愚考除曰考なりといへども茶人に連歌

は附肌むはたらくして安堂なり　むと止めいう

歌に花なひて変見のなりまりを記す紹鷗の語を

書し瓢の花生なりを隠去の求入りて不始なり

中に茶数きを一百は俗優なりて古の数主を

と数向を立るに連歌師の行なるの連歌の

しと云を含んなり茶を嗜む

を立むるいそうくして万なる自は茶の含唐

らのなり紹鷗を利休は原京に茶を呼すの宮

に隣るこの中に大黒庵と号すより　和漢三才

圖會に見ゆ

連歌は

滝蓋に茶押まけて言とめむ

一書に井蛙抄に曰後深院の侍時吉因家に

て清逸歌なりなり女房弁内侍なれ

て笠中より拾ひ出す民部卿入道安房の中次より
て此笠の際より何公もらまきるこの事れかるより
して滝のひくきより万きまき合て笠ゑまきさる
かとよりは連歌を志すのうるより為教めれ
山しより柴を折て滝の前ゑ下るくくきて
侍りそまきて水の音を字えたるうるとて
岩苔とりの 篠まさけうれ
弁地日近材集より力八十草とて水の底より生
すと云そせまきたるそ蓋ゑとりて篭を作り
その中より入て松柏の本をとより蓋作るの縄を
結ひ作けて夫より竜まして数丈の谷一ちるこ
山川の魚とりるくまるとて又しうくのぬくするより

蓮二枚 廣 きりの唐
数ものの高ゑまきさるより蓋作る

為秀雲孫採師喜撰法師為好歌なのそのし
そまきこの侍りうくしきるを略去此
より堂をもる為後の侍塔 掬丸と味をより一し第一そ
雲孫採師の 竪 横の五尺ゑまきるあ孫孔唐と
ものまはるまきまし芝りのやなるむとるて作けて
為ゑりそこを麦作るとりはより一るまて先明の侍
より侍りうくめるりの為ゑ方丈の記りる唐孔
北より少地をもるあのそるる唐孔
ひて堂をとす則りるしの業孝をうゆと云こ
まるゑ方丈の記そ一丈四方ゑり蓮二枚 廣
きとものまはるまより作是より作是孝作るくこの
侍より必堂をもり業孝をそるりて麦作るとる
潜しまるる正の俳諧の尚ゑりとるる一一
基 歩 を れるる きぬしの月

愚考此日郊外に送りて帰るを惜むそしきりきめしなる意まで限りなく思ふまゝの義をさしてきぬしといふを本朝の風俗之

風流形き秋の日永に網入よ

高翔の湊れをとり笑ひよ

愚考躍を江源武鑑に曰愛長の比伊勢

まてくしまのと云て伊勢音頭といふ

伊勢の河法を白れうに見えねとも世よ

のうて網に出て見てくいやさの高名網

まて躍をすると学いやとのやう乳事を

をとりて見に行くと云るを笑ひふ形

むとして家に伊勢う自然と白れうらふく

まてなるるり芝則俳白れあつのひまて二日

の間に伊勢と学ぶる上毎の毎度なり

なるまのさと称流行して五畿

一書に雑混孫と書き八郷大系まて長多の

夜男女聚會し席を同しくして雑り寝ると云く

絶ず案に曰月一日江列坂田郡女子を男をお

もろ数本と諸を法をうに入りて生ると

云て白意をさとねやる毎をまたうをめつしく

まるべうをとりを通路のて毎りの事にて

侍るる

ぼうし一説聟れ名る形

蒙筆曰一寸に法ぼうしと書て侍るを非なり

さき俗中祝来の侍る日本国中漢和の分

まてそこの何る見たりて形

うに雇ふ通るしる方れ到深身て有

らんの家の五るり等と成て終に聟と

以上ひろめる事は生涯をたゝかひ終りくるしこの
しこうてさるべしかるに世むうまれ定め
るべき人中の往事を法らしれるまゝにたる
十餘の通情をもつて次は脇の我事れ自まて安坂
の刻まて為是すべし

行事の為めに洗ふ土器

愚考行事は天子御幸を仙洞蔡邕独断曰
天子之車駕所至臣民被二恩澤一以為二僥倖一
天子の行不幸者と以上美なり
新を唐りの祇治のいりめ〳〵
一書に茶白行事百生て義祇治の新白ふ交代
きしるる義祇治のるまて古刀張盤まえ中
仮令八正月依渡り則正二月加賀大様廣次三月
越茶字國吉と義祇治の次第なり　一説ふ

往古を番祇治國しより用し禁東一説ふ
百御釵を新て献まして　蔡邕曰唐りの祇
治常は祇治に行事の土器を洗ふを
以て為の志をの出るるまて一國一城の主京都者
護の番設まて刀釵を切をきまるる一一昔を
武士自ら〳〵諸しの刀釵をうち用ひるるり
さまて〳〵その中に多大名なり故一一そまを行
事なるて為て敵流まし〳〵むを乱世まを
為る故一一事故伝ぬしてまれしたりぬ一く
きとしく書れうをまるるて〳〵近くを伊達政
宗細川三斧なるとい法を近祇治まて設宗
を殺軍家に為の三斧を禁國ふ自仮を左て
まるるまを〳〵を妙まるるとうけ為るを
まて一人まて十を謀る一〳〵事なる祇治と仮

して大名をこのうちに此時代の時俗の名称なり
次に門ひらくとなりて為長すし
愚考刀剣記曰人王八十二代後鳥羽院の御時
北条義時を誅伐し給ふ今世に敵国記イ一刀
して武名ありし心なりとの事なり
とあるを考へるに備前則宗 備中貞次
備前延房 粟田口国安 備前順次 粟田口国友
備前宗吉 備中次家 備前助宗 備前行国
備前助成 備前助延 右十二人を考へるに十
二ヶ月より院内より番上番上番上皇も御自作
ならせ給へ尤此師徳 応治八人 粟田口久国
備前行吉 備中次家 備中貞次 備中真次
備中忠国 備中行次 備前真則 右八人の中
にて八月の番工次家入作らせ給へて君御自

焼刃〜の〜の気を考へて御所焼と云ふ此時の奉行
を光親朝臣御太刀磨を国弘為貞の二人と云云
行幸を天子方論なり
応治の八月の番工次家
門外まで朔日八月の吉事なり
右の如く行幸より応治よりの月のあ〜らを三百
のはてひ気を八月の番応治次家番鍛冶行事
行事〜〜なれて自燈日〜〜なり人供奉剣者を
あんまりて必定なり又兼久の記に曰東国の軍勢
既のかりとき三元年三大炊の御門の入むけ
祇園六郎左衛門尉の御太刀を彼は所焼
てゆるかの名刀ありと云云此事元儀
著〜〜なる武徳志なる記〜〜作るとて番応治
は太刀磨奉行等のるの酔醒記なるものと

あり右等の書を閲してうるおいをはらす
べし唯推量をうるのみを解しうること

昌陸の松とのべる所代の事

一書に昌陸を里村式連歌の花れりとて元和
中れ人なり　一書に寛永年中正月十一日松の数自を
献ずるの折営の侍連歌於連歌間侍奥形
自ゆ小代く法眼位に叙す

元日れ木間の競る足ゆ
一書に年たるの山ひの袖に ひく弱の絶せ
ぬるの書の意を古歌とるるとて
一書に木間を門松の見立すて侍り弱の色
なるるとく作りなるるの一
の木ゆるる一年既式終て天子をえるを

三代実録に見えるより傳ひるまハ定
日のるるれりしと見ゆるを見るに
る所を見るに見るに
愚考元日の儀式を初しきはめて競るるる一
なるとと舊事記に神武天皇元年に始て初
競るを則日の脚のゆるやの形をいるる
し魏志傳曰人間一世ぬ白弱過隙耳又索隠
曰白駒謂日影也と
るるる一　一説に木間を地名鞍るの林麓を
元日れ吉例競るを宵とるをいぬ
門を松苔業園れゆきさに
一書に貞徳の別荘苔業園をれ即奥ことに
經の音水かのるらく　梅白
玄味堂曰白氏文集に曰梅花欲開裡魚入龍門

曙れ人気牡丹震よひらきそう
愚考え朝の早天かのしとゆゆくく人れ面冥
きまま暴和よりてき音とたて牡丹花のなさ毒
よひらきて雄馨なるこの姿しとるり
腰てらす元日里れ眠わこの那
愚考平この信濃まて表摘頃の唱弧ようこよ
ばくしばたきく山れ腰を照らす紗綾や綸子
を腰をてらす光るる光れ彩しきよ紗
綾綸子等れ等を表めてゆるやよ手眠わ春
称を腰てらすと彼まるるる一
星ちらし震まる先の四方れ色
愚考太一金鏡経曰極人氏斗極を見て
四方れ名を宣む東西南北是るり又内裏雛
よ日九天地の間東西を狭く南北をゆく長し

ゆよ南北を長とそりよるり此句四方弥の意
味を含めり若てり禁中の彼法をそらめ
称よ自彼るこの法等ることゆ時自分るよよ
られ此心指まて解さすむ虚実の遠ひの
らむり
そそとて小松負らむ 牛れ ゆ免
一書よきのよ子日も牛のそよとて小松を負
よの姿やそそうむと子日をよきのよ子日を姿
れ日とりよ熱四を
芹摘とそたけて酒るるき 瓢る
愚考詩曰思樂泮水薄采其芹魯侯戾止中略
在泮飲酒
花よ埋まて変より亜よ死むり孔
一書よ為花埋残姿 對古人

古池や蛙飛こむ水の音

此句を真如實相の玄章とすてを大事の中れ大変なり中し他より評すべきなりとなる何某くまうの注釈抜こと解るすきおくるれを俗なるの一しいなる解くくるる玄意を探る事なのく俗音の一字をいうをれのしやうむ姿を解くべきく解くべきの玄音なるを注釈をとくるるものを玉と注を塗金と箔するれ紙変をとらむ玄用の舌をうこするるまとして蕉風一流の肝要只此一事なるを古池集水鏡を見て玄中れ玄を納得すべし

春野琴

是迄よさらうを曲ふ庵二つ

玄味堂日是跡を役形去の是迄なり庵を右往庵を往庵なり横を芳野山を和なり曲をなるるるる　愚考吉野山なるを美野琴とハ歌を美なるの殊よ横を吉野山なるを美野琴とハ歌を吉の横をまけるとして縁をえをを吉の横をまけるとして縁をえをを俗なるなるの不ようし目を法けて解すべきるれ又美野という強書なる吉野よなるきるれ強評なるとなるて撰集抄よる云信野国佐野とハ和よ拾遺しなるよなるの強のよ法をて分入えまハ形なるれ結挽なるえゆのよ法をて分入えまハ形なるれ結挽なるこのや萩落なるむと形なるけなる庵なるの門よ強物なるよ形しすなるす強なるまを西形向て云ハ強なるしなるなるハ入いひしそ強なるくて芳一ハ又云ハ強なるなるれ入いひしそ強なるくて強

かゝる行ゑて影くて此寺よりもと計りにて余念なし
西刹又奥の方へ是も花れば行にほさゝて分入りけるが
ま松楓し形の高ゆりさし殺きゝ見ぬ人も見え
ありふもちりにその偽合掌して眼をふさぎいと
往生しぬるとなりし是より此次第を猿簑の
附句にしてすりて注す一ツまでもの趣を一句に
作りぬるの根本まて此寺よりし物まじえ寺には寶
て桜を囲て唐として松ハし伝へむものなど納
諸の茶を続白に動して右依ちるも此なる寺
野吟佐野の讃是記して足跡あり唐みて額
も甚の僧にして峰ちのたるよりと言ん寺ハ
さくらを形曲てとし名わが一句れ魂なり

麓　寺かしれぬものなり　桜に動

愚考禁ちなて小倉山のつりとなり古歌に松の

みや双の是の禁ちる新端れ月まに新りしみなそ
梢なりてさくら花連きさなゐ心
一書に梢ふて余れ木よりもも芽なしつてるも連
をまたぬ連桜にかけ合すふるものなり

武蔵坊をとふらぬ

すゞのけやをてり空れ夜　川

愚考鈴繋ふて山伏の法具なりそきまじりに似て
あ枝の形ゆへに名とす大和本草に曰寺僧ら
むとするの時白花をひらき唐名を形す一名小
てまり鈴繋ふて資本什物記曰役小角が時
入箕面滝穴直奉値龍樹菩薩遺傳授之九以
墨色為本黒色者不移余色唯任自位而已是
則十界一念之義相也云々

夕影に雑炊是きぬ菓盛に

敬称云盧倫の詩の一句田夫就餉遅依草
雲形しく人をやすむる月見哉
一書に西上人曰しに雲れうる秋きを月
をりてをすかさしうりを道の意なり
色うく家も面白や秋の月
愚考色うく家を寺の秋初なり祖翁の句
に色うくものの先うるを一二の羅王堂をしうく
色をの時珍曰反祭王始以泥坯焼供く
具足若て新の外多し月見歌
愚考一本に具足若き新となるを非く
すして群集の形を画くを新の外多く書
て此方より見渡すなり